

身体芸術の文理融合型学際研究と国際身体芸術アーカイブズ・コンソーシアムの設立

① 計画の概要

本プロジェクトは、古来より演劇や芸能、舞踊等の身体芸術を通じて蓄積されてきた身体表現の膨大な記録をデジタルアーカイブ化し、演劇学、舞踊学、映像学等の人文科学のみならず、最先端の情報工学や人間工学、VR技術、ロボティクス等理工学の知と技術を用いて解析し応用する文理融合型学際研究プロジェクトである。その一環として、アーカイブの構築と国際的利活用を促進する国際身体芸術アーカイブズ・コンソーシアムを設立する。

身体芸術は日本が世界に誇る文化であり、歌舞伎や能・狂言等の古典芸能から現代演劇やコンテンポラリー・ダンスにいたるまで、国際的な関心が極めて高い。その一方で、人間の身体の捉え方は、人工知能や義肢、ロボティクス等の研究の発展とともに大きく変容している。身体芸術もそうした動向と無縁ではなく、東京藝術大学の平田オリザ氏と大阪大学石黒浩研究室によるロボット演劇は、生身の身体を前提としてきた従来の演劇観に一石を投じた。また、演劇を障害者教育や発達障害の治療に応用するなど、教育・医療現場での身体表現の新たな活用法にも注目が高まっている。このような現状に鑑み、身体芸術を従来の演劇学や舞踊学の視点からだけでなく、人文科学・理工学の知の統合を図り、先端的かつ総合的に研究することにより、世界の身体芸術研究の牽引を目指す。

本プロジェクト遂行にあたっては、坪内逍遙による1928年の創立以来、百万点にも及ぶ演劇・芸能資料を収集・保存し、身体芸術研究の発展に寄与してきた早稲田大学坪内博士記念演劇博物館（以下「演劇博物館」）が中核となり、早稲田大学先進理工学術院・スポーツ科学学術院・人間科学学術院、慶應義塾大学アート・センター土方巽アーカイブ等身体芸術の主要アーカイブと人文系研究機関、東京大学生産技術研究所や情報理工学系研究科、国立情報学研究所等理系研究機関、劇団・劇場・実践者とネットワークを形成する。

② 学術的な意義

現在、世界的には情報技術の進展により文化・芸術のアーカイブ化が進み、それをプラットフォームとした身体芸術と情報工学などの文理融合型研究が加速している。その代表的なものとして、モーションキャプチャシステムを用いた身体動作の3次元時系列計測や、コンピューターグラフィクスを用いた熟練者と初心者の動作比較などが挙げられる。しかしながら、演劇に代表される身体芸術は生身の俳優によって観客の眼前で上演されるため、本来的に一回性をその特質とし、舞台自体を保存することは不可能である。ゆえにこれらの研究では、舞台での「真」の身体動作を舞台外で再現できるかという根本的な問題が発生するため、実際の舞台の膨大な記録をデータ化して解析する研究の発展が期待されている。また、リアルタイムで計測できる被写体は現代の演者のみに限定されるため、たとえば長年の歴史の中で時代とともに変容してきた伝統芸能の表現方法を正確に知るには、集積されたデータを用いて過去の記録と現代を比較し分析するなど、伝統的に文化研究を扱ってきた人文諸学と情報工学に代表される理工学との統合的な学際研究が必要である。

演劇博物館は90年に及ぶ歴史のなかで、写真や映像、音源等の視聴覚資料から、模型・衣装・道具類等の博物資料や戯曲・脚本・台本類等の文字資料を収集し、デジタルアーカイブの構築により資料の公開と共有を図り、研究の発展に貢献してきた。本プロジェクトでは、このノウハウを活かして身体芸術の諸資料の収集・統合・デジタル化を推進する。国際身体芸術アーカイブズ・コンソーシアムの設立によりオープンデータ化が進めば、身体芸術自体の研究が飛躍的に進展するのみならず、身体表現のビッグデータのVR技術やロボティクス等の理工学研究における利活用、教育や医療への応用なども促進され、新たな学術研究の領域を開拓し、世界をリードすることが可能となるだろう。

③ 実施機関と実施体制

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館が中核となって、早稲田大学理工学術院・スポーツ科学学術院・人間科学学術院との連携はもちろん、慶應義塾大学アート・センター土方巽アーカイブをはじめとする身体芸術主要アーカイブ、大阪大学、東京藝術大学、明治大学等身体芸術関連学科を擁する諸大学、東京大学生産技術研究所や情報理工学系研究科、国立情報学研究所等の理系研究機関や関連学会等の研究者コミュニティ、国立劇場、新国立劇場、東京芸術劇場等主要劇場、劇団、文化施設等の諸機関・諸団体、身体芸術の実践者コミュニティとネットワークを形成することにより、国家的な規模でのアーカイブを構築し、本プロジェクトを推進する。中核となる演劇博物館は、アジアで唯一の演劇専門総合博物館として、百万点にもおよぶ身体芸術関連資料を収集しており、また、日本学術振興会科学研究費研究成果公開促進費の「重点データベース」に採択された実績を有する。加えて、これまで文部科学省21世紀COE事業、グローバルCOE事業等を通じて演劇研究拠点として世界的に認知され、また、文部科学省共同利用・共同研究拠点として認定された演劇映像学連携研究拠点を運営してきた実績があり、そ



のいずれもが早稲田大学内のみにとどまらず、国内外の諸大学や関連機関に対して広く門戸を開くことで大きな成果を上げ、高く評価されてきた。

本プロジェクトは、演劇博物館を中心に連携大学・機関とともに完成年度の国際身体芸術アーカイブズ・コンソーシアム設立に向けて準備室を設置し、連携大学・機関の委員からなる運営協議会と専従事務局が運営に当たり、以下の3部門を設置する。1. 統合デジタルアーカイブ構築部門、2. 学際研究部門、3. 国際化部門。これらの人材確保にあたっては、国内外に門戸を開いて優秀な人材を広く集めると同時に、各部門がそれぞれに人材育成プログラムを構築・推進することとする。

④ 所要経費

【施設・設備】本プロジェクトでは、公開と利活用のための施設の設置が不可欠である。諸資料を保存する収蔵庫を備え、デジタル化に必要な機器、ブースや上映設備、会議室を完備し、一般の利用者に開かれた施設の建設を行う。施設・設備に関わる経費は以下の通り。施設建築費：22億円、上映設備：5億円、デジタル化システム構築：5億円、デジタル化のための諸経費：5億円

【運営】国際身体芸術アーカイブズ・コンソーシアム準備室を開設し、運営協議会と専従事務局の下に以下の3部門を設置する。1. 統合デジタルアーカイブ構築部門：企画・運営担当プロデューサー、進捗管理マネージャー、専門的デジタル・アーキヴィストを置く。2. 学際研究部門：国内外の連携大学・研究機関の専門研究者、リサーチ・アドミニストレーター、研究助教、助手を置く。3. 国際化部門：翻訳セクション、著作権処理セクション、国際交流セクションを設置する。運営経費は以下の通り。研究費：3億×5年=15億円、人件費：年間1億×5年=5億円（内訳：プロデューサー1人、マネージャー1人、デジタル・アーキヴィスト3人、リサーチアシスタント1人、助教1人、助手5人）

⑤ 進捗状況

2020年度に、国際デジタルアーカイブズ・コンソーシアム設立に向けて、参加大学・研究機関等を確定し、準備室を開設する。準備室には、専従事務局と諸大学・諸機関の研究者からなる運営協議会を設置し、その下に1. 統合デジタルアーカイブ構築部門、2. 学際研究部門、3. 国際化部門を設置し、組織基盤整備を行う。統合デジタルアーカイブ構築部門には、全体の企画・事業計画担当プロデューサー、事業の進捗管理マネージャー、専門的なデジタル・アーキヴィストを置く。研究部門には、国内外の連携大学・研究機関の専門研究者のほか、専従リサーチ・アドミニストレーター、研究助教、助手を置く。そのため、国内外から広く人材を募集し、運営協議会の人事部会による選考を行う。また、コンソーシアム拠点施設の設計に着手する。同時に、国立情報学研究所と連携して、アーカイブ・システムの設計を行う。2021年度から本格的に事業を開始し、事務局が全体を取りまとめながら、各機関や団体に散在する身体芸術資料の大規模な収集とデジタル化を行い、学際的研究も同時に開始する。研究面では、文化研究を扱う人文諸学と情報工学に代表される理工学との融合研究を推進する。また、コンソーシアム稼働準備として、運営協議会を中心に、コンソーシアム運営の事業体検討、事業体設置の準備を開始する。同時に国際化部門では、現状の著作権法の問題点の洗い出しや、法改正に向けた提言の取りまとめなどを中心とした取り組みを開始し、2022年度・23年度に実現に向けて働きかける。2023年度までに拠点施設の建設を行い、最終年度の2024年度より、準備室の運営体制を引き継ぎながら正式に稼働する。2023年から2024年にかけて、研究部門と国際化部門が連携し、海外の研究機関と合同での国際シンポジウムを実施し、文理融合での身体芸術研究の成果を広く社会へ向けて情報発信を行う。

⑥ 社会的価値

国際身体芸術アーカイブズ・コンソーシアムの設立により、日本が世界に誇る身体芸術のデータが世界の共有財産となり、海外からのアクセスも容易になる。それにより、現在世界的に需要が増加している古典から現代までの日本演劇の市場が活性化することが期待され、東京オリンピック・パラリンピックに向けて、文化立国日本のイメージ形成に寄与しうる。また、人文学と理工学の文理融合型学際研究の推進により新領域の創出を含めて学術研究が発展するのみならず、身体表現のビッグデータを障害者教育や、自閉症スペクトラム障害、発達障害等の治療に応用するなど、教育・医療現場での利活用が促進されるだろう。

また、本計画は学際研究拠点の整備でもあることから、高度に細分化された専門分野をつなぐためのコーディネート人材の育成につながる。将来的には、従来の博物館学芸員や図書館司書等の資格とは異なる、デジタル・アーキヴィストと呼ばれる専門人材の新たなキャリアパス創出へとつながる。これらの高度専門人材が世界を舞台に日本固有の文化を発信していくことによって、日本人にとっても改めて我が国が誇る文化芸能の価値を再認識する契機になることが見込まれる。

⑦ 本計画に関する連絡先

岡室 美奈子（早稲田大学文学学術院、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館）